

1 尊敬する高位聖職者の皆さん。親愛なる会場の皆さん。

2 与えられた「非暴力への回帰を宗教は自らに問う」という主題に即して、15分
3 間という制約の中で、十全にお話しすることは極めてむずかしいと私には思われ
4 ます。このテーマからは、テロリズムに対する批判やテロ行為が宗教から生まれ
5 てきているのではないかという考えに対しての吟味等、さまざまな角度からの考
6 察が可能であると思われま。ご紹介いただいたように私は日本の禅仏教の僧侶
7 ですが、この会場にはキリスト教の方が相対的に多いと思われま。ヨーロ
8 ッパのキリスト教に対する問題提起という形で、これからお話をしたいと思いま
9 す。今日の立場で簡単に過去を批判してもよいのか、ということも意識しながら、
10 宗教に関連して諍いが起きてくる源について、皆さんとご一緒に考えてみたいと思
11 います。

12 知人のクリスチャンである石川明人、桃山学院大学准教授からご教示いただ
13 いたことですが、日本ではキリスト教徒の方が次のような言い方で、キリスト教が
14 平和を重んじる愛の宗教であることを強調しようとしています。

15 ①「キリスト教徒がこれまで多くの戦争をしてきたのは事実ですが、それはそ
16 の時のキリスト教徒の過ちであって、キリスト教そのものが好戦的なものではあり
17 ません。」

18 ②「私たちが信じているのは、戦争をしてきたキリスト教ではなく、愛を説く
19 イエス・キリストなのです。」

20 ③「戦争を繰り返してきたこと自体、罪深い私たちが神を必要とする何よりの
21 証拠ではないでしょうか。」

22 こうした言い方に対して石川氏は「キリスト教は、この世から戦争を根絶する
23 ことに、2000年かけても成功していない。キリスト教それ自体が、これまで実に
24 多くの戦争や暴力に関わってきたのだ。」と言っています。

25 私は世の中に複数の宗教が存在し、それぞれが真理を主張しているということ
26 に対して、どう考えたらよいのかとずっと思案してきました。その中でキリスト
27 教の修道士の皆さんや神父様、牧師様たちとの出会いがあり、多くのことを学ぶ
28 ことができ心から感謝しています。しかし、次の事例に直面したとき、私は頭を
29 抱えました。

30 例えば、「北の十字軍」と呼ばれている事象です。12世紀後半に成立したドイ
31 ツ騎士修道会はプロイセン方面をキリスト教化するため、戦いを仕掛けていき、
32 植民地化してゆきました。さらにリトアニア方面に攻め込み、最終的には、いわ
33 ばリクリエーションとして略奪旅行（軍旅）の手引きを重ねていったことです。

34 山内進、一橋大学前学長は「ドイツ騎士修道会は、キリスト教を守り広めるため
35 の組織、異教徒と戦うことを使命とする、いわば軍事組織であった。（略）（つ
36 まり）『敵』が常に必要だった。」と述べています。

37 もう一つの事例として、フランスの国歌「ラ・マルセイエーズ」で繰り返され
38 る部分をあげたいと思います。

39 Aux armes, citoyens ! 「武器を取るのだ、我が市民よ！」

40 Formez vos bataillons ! 「隊列を整えよ！」

41 Marchons ! marchons ! 「進め！進め！」

42 Qu'un sang impur abreuve nos sillons !

43 「敵の穢れた血が我らの畑の畝を満たすまで！」

44 と歌われています、敵を殺傷し、その血で畑の畝をいっぱいにしようという呼び
45 かけがキリスト教徒を中心とする国の国歌として存立しているのです。

46 日本の事例もご紹介します。高橋哲哉、東京大学大学院教授は、日本でも明治
47 から第二次世界大戦敗戦まで、神道、仏教、キリスト教を含め、多くの宗教者が
48 戦争に加担することを称賛してきたことを指摘しています。たとえば、日中戦争
49 が始まった翌年の1938年、私たちの宗派の伊藤道海禅師は「皇軍のその赫赫たる
50 武勲の輝くところ、そこには忠勇義烈なる将兵各位の鮮血が流れています。肉弾
51 が飛んでいます。」と日本軍の兵士の死傷を賛美しています。さらに戦死した兵
52 士を思えば国民は襟を正さざるをえず、自己の勤めに邁進する。兵士と国民の心
53 が一つになって火を放っているような今日ただ今の日本の姿は誠にありがたいこ
54 とだと戦争を讃えています。仏教をはじめ日本の各宗教は、一部のごく少数の例
55 外を除き、第二次世界大戦中、国家に隷属する形で、総力戦を志向する軍部の意
56 向を宗教的に補完する役割を果たしていたと考えられます。

57 次の事例は、今から72年前の太平洋戦争時のものです。1945年8月6日、テニ
58 ヤン島のアメリカ軍基地から原爆搭載機が出撃するとき、従軍牧師のウイリア
59 ム・ダウニー大尉は次のように祈りました。「全能の父なる神よ、あなたを愛す
60 る者の祈りをお聞きくださる神よ、」と呼びかけます。「全能の神」と称されて
61 いるのはもともと「万軍の主」という言い方で表され、旧約聖書以来「戦いにお
62 いて勝利をもたらす神の固有名詞」と私は学んでいます。

63 「わたしたちはあなたが、天の高さも恐れずに敵との戦いを続ける者たちとと
64 もにいてくださるよう祈ります。」飛行機の乗組員たちを前にしての祈りです
65 から、「天の高さも恐れずに敵との戦いを続ける者たち」という表現になってい
66 ます。「彼らも、わたしたちと同じく、あなたのお力を知りますように。そして

67 あなたのお力を身にまとい、彼らが戦争を早く終わらせることができますよう
68 に。」つまり、戦いに勝つことのできる神様の力を乗組員が理解し、神様の力が
69 飛行士たちに乗り移るようにと祈られています。「戦争の終わりが早く来ますよ
70 うに、そしてもう一度地に平和が訪れますように、あなたに祈ります。あなた
71 のご加護によって、今夜飛行する兵士たちが無事にわたしたちのところへ帰ってき
72 ますように。わたしたちはあなたを信じ、今もまたこれから先も永遠にあなた
73 のご加護をうけていることを知って前に進みます。イエス・キリストの御名によ
74 って、アーメン」と締めくくられています。

75 この祈りとともに、エノラ・ゲイと名付けられた B29 爆撃機はテニヤン島を飛
76 び立ち、広島に原爆を落とし、無事帰還しました。広島市の公式記録では、広島
77 市だけで、少なく見積もっても 14 万人の一般市民らが原爆投下を直接の死因と
78 して同年の末までに亡くなっています。その中には当然、仏教徒ばかりではなく、
79 キリスト教の方も含まれていると考えます。素朴な思いで恐縮ですが、キリスト
80 教の神様はなぜキリストを信じる広島日本人は助けてはくたさらなかったのだ
81 でしょうか。彼らが日本人だったからでしょうか。それとも広島に住んでいたから
82 でしょうか。広島では米軍の捕虜も生活しており、そのうちの 12 名が日本人と一
83 緒に亡くなりました。後に枢機卿になるスペルマン大司教は、テニヤンでミサを
84 挙げる際、「諸君、戦い続けよ」「われわれは自由のために、正義のために、そ
85 して日本人が真珠湾を攻撃した際の恐怖を打ち負かすために戦っているのだ」と
86 力説しました。こうした事実も石川明人准教授からご教示いただきました。第二
87 次世界大戦が早く終結したとして原爆投下を評価する向きもありますが、私は原
88 爆が神への祈りとともに落とされたことを知って、複雑な思いに駆られました。

89 正義とはいったい何なのでしょう。これまで、どんな戦争においても正義、
90 大義を、戦う双方が必要としてきました。もちろん正当防衛は認められなければ
91 ならないと思いますが、戦いを仕掛けてよい正義や大義が本当に存在するのだ
92 でしょうか。実は私は「正義」という言葉に強い違和感を覚えているのです。なぜな
93 ら「正義」は「不正義」を対となし、正義は不正義に勝たねばならないからであ
94 ります。つまり「正義」という言葉、考え方自体に「争うこと」もしくは「断罪
95 すること」が内包されているのです。

96 そこで思い起こされるのは、日本の江戸時代から続く伝統的な農村社会で行わ
97 れていたとされる「村八分」という習慣です。原則として他所に移転すること
98 できない村落共同体のなかで、秩序を守らなかったものに対してなされる制裁で
99 した。共同体の住民が結束して、十ある基本的交際のうちの八つを断つというこ

100 とでした。具体的には成人への通過儀礼（冠）、結婚（婚）、出産、病気、家の
101 新改築、水害、年回法要（祭）、旅行には一切関わらないということです。しかし、
102 残りの火事と葬儀（葬）の場合だけは関与するという決まりでした。つまり、地
103 域社会の中で問題が生じて、その問題を起こした個人、もしくは家族に対して
104 100%の制裁を科さないで共存する道を取ったということでしょう。

105 ここで、正義を白もしくは○、不正義を黒もしくは×にたとえてみましょう。
106 たとえて言えば、昔の日本人は白黒をはっきりさせないで灰色の部分を大事にし
107 たということになるでしょう。基本的には論争が避けられ、○でもない、×でも
108 ない、△の場合が大事にされたと言えるかもしれません。なぜなら一定の土地に
109 縛り付けられている人たちが摩擦を起こしながらも共存していくためには、白
110 （○）黒（×）ははっきりさせない（△）で争わないという立場も必要であったか
111 らであります。西洋、並びに現在の日本でも、この態度は曖昧なものとして批判
112 の対象となるかもしれません。しかし異なった立場のものが地球という限られた
113 空間での共存を余儀なくされるとき、参考になる一つのヒントではないでしょう
114 か。

115 宗教の共存という観点から考えてみましょう。この宗教だけが正しいとする排
116 他主義、すべての宗教はこの宗教に収斂されるという包括主義、そして、すべて
117 の宗教は一つの神の周りを回っているという多元主義が思い浮かびますが、個々
118 の宗教の発生と展開はローカルなものかもしれません。したがって、それを普遍
119 化して世界を一つの色にまとめ上げようとする自体に無理があり、そこに争
120 いの元となるものがある、という考えもなりたつかもしれません。

121 これまでの「平和への祈りの集い」でも申し上げてきましたが、私の修行道場
122 のお師匠様は「正しい」という字は字源的には「一つに止まる」と書く。こっち
123 が正しい、あっちが間違っていると言っている間は、まだ本当の正しさに到達し
124 てはいない。それでもってみんなが一つにまとめられる、というのが本当の正しさ
125 だ、と仰っていました。

126 更に言えば、宗教の違いがもとで争いが起こると思われるとき、見えない、あ
127 るいは隠れた自己中心主義があるのではないのでしょうか。言葉は歴史的なもので
128 すからやむをえないものなのかもしれませんが、religionがキリスト教を意味し、
129 religionsがその他の宗教を指すという単数、複数の違いに違和感を覚えるのは私
130 のひがみでしょうか。

131 私がここで申し上げたいことは非暴力への回帰を訴える前に、それぞれの宗教
132 が自分の立場を数ある宗教の中の一つと認める必要があるのではないかというこ

133 とです。自分以外の他者、および他のそれぞれの宗教の立場を丸ごと明確に認め
 134 る必要があるのではないのでしょうか。さもないと宗教が異なるということに起因
 135 するかと思われる争いを防ぐことがむずかしいのではないかと感じるからであり
 136 ます。

137 ドアを開けるのにも「力」が必要です。ありとあらゆる行動が「力」を必要と
 138 します。だから私は「力」を否定するものではありません。ただ、目的が立派で
 139 あれば、どんな邪悪な手段も許されるということはありません。と思うのです。「力」
 140 と暴力は異なります。目的以前に手段が大事だということを、私は《人間として》
 141 強調したいのです。なぜ《宗教者として》ではなく《人間として》強調したいの
 142 か説明します。それは宗教の中に人間を分け隔てする機能が内在していると考え
 143 るからであります。宗教には、たとえばユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリム、
 144 ヒンズー教徒、仏教徒という風に人を分ける機能があります。

145 しかし、人間は肌の色が違っても、国籍が異なっても、性差があっても、
 146 年齢がさまざまであっても、考え方や言葉が理解できなくても、身体の中には同
 147 じ赤い血が流れています。138 億年と言われている宇宙の歴史、生命の歴史をそれ
 148 ぞれ担っています。そこに違いはないでしょう。だから、仏教、禅の立場に立っ
 149 た上で、私は《人間として》訴えたいのです。自分の信仰以外の他の信仰も、そ
 150 の存立を丸ごと認めよ、と。そしてそのことこそが宗教に関連してテロを起こす
 151 人たちに対して、非暴力を訴えることを有効にする最短の道であるということ。

152 ここで、ジョン・レノンの「イマジン」という皆さんもよくご存じの曲の歌詞
 153 の2番を取り上げてみたいと思います。

154 Imagine there's no countries

155 「思い浮かべてごらん。(国境で人を分け隔てする) 国々のない世界を」

156 It isn't hard to do 「そうむずかしくはない」

157 Nothing to kill or die for 「国のために殺すこともなく死ぬこともない」

158 And no religion too 「そして宗教もない」

159 Imagine all the people 「思い浮かべてごらん みんなが」

160 Living life in peace 「平和なうちに生きているという生き方を」

161 You fu

162

163 You may say I'm a dreamer 「私は夢見る人だと言われるかもしれない」

164 But I'm not the only one 「だけど私は一人っきりではない」

165 I hope someday you'll join us 「願っている いつかみんなが合流して」

166 And the world will be as one 「世界が一つにまとまっているということ」
167 ここでは国境、つまり障壁を作ってしまう国家が人々を分け隔てるものとし
168 て批判されています。同時に宗教も批判の対象に挙げられています。既に検討し
169 てきたことですが、国家が国民を戦争に送り出すように、宗教もまた歴史的には
170 人を区分けし、戦場に送り出し、殺戮を推奨してきたからだと思います。
171 しかし、宗教にはご承知のように争いを避ける智恵も内包されています。例え
172 ば詩編の 34-15 では「悪を避け善を行い、平和を尋ね求め、追い求めよ」と表現
173 されています。同時に詩編の 3-4 では「私の神よ、お救いください。すべての敵
174 の顎を打ち、神に逆らう者の歯を砕いてください」とあります。
175 一般論として言えば、宗教には戦うことと平和を求めることの両側面が内包さ
176 れているということでもあります。したがって宗教に関わる者はそれぞれの時処位
177 において、それぞれの判断から、宗教の中にある平和への傾きを強くしていかな
178 ければならないということになります。
179 最後に私たちの宗祖、道元禅師の言葉を引用することをお許しいただきたいと
180 思います。「人の心元より善悪なし。善悪は縁に随つておこる。(略)故に善縁
181 にあへばよくなり、悪縁に近づけばわるくなるなり。我が心本よりわるしと思ふ
182 ことなかれ。ただ善縁に随ふべきなり。」という言葉です。私にとってこの「平
183 和の祈りの集い」に参加するということは「善縁」にあうということでありまし
184 た。
185 これまでの31年間、おりおり、お話しするにむずかしい講題をいつもいただい
186 てきました。振り返ってみれば、それによって自分の心を言葉に表すことができ
187 たのかもしれない。そのことに感謝し、皆さんには内容的に聞きづらいところ
188 があつたかもしれませんが、お許しをいただきたいと思います。そしてそれと同
189 時に、よく辛抱して、最後までお話を聞いてくださったことに心より感謝申し上
190 げます。
191 皆さん、ご清聴どうもありがとうございました。